

古文書を読む会学習記録

作成日 令和 1年 8月24日

開催日	令和 1年 8月22日	時 間	10:00~12:00
場 所	区民活動センター	受講者	15名
講 師	真田 雅行氏	作成者	大門 利晴
テーマ	第二学習 北搓聞略(大黒屋光大夫漂流記録)④		
概 要	<p>カムチャッカまで渡れば後は地続きなので何とかなるだろうと古釘や島に打ちよせた木等を集め一年ほどで 600 石ほどの船を作り、ロシア人 25 人光太夫 9 人が乗り込みアミンシャッカに 7 月 18 日着いた。この地は 5,60 軒ほどの小部落だが、ロシアの役人が多くいた。光太夫等は彼らの家に分宿した。</p> <p>着いた夜の食は乾魚等を鉢に盛り、熊手のようなもの（フォーク）と小刀（ナイフ）、大匙（スプーン）を出してくれた。翌朝は麦の焼餅と汁、この汁は何ものかはわからなかった。が、この家の老女が朝夕桶をもって牛小屋に入るのを見るとその桶に牛の乳を搾っている。汁とはこのことであった。磯吉はこれを見てけがわらしいと皆に言いその後は誰もその汁を食しなかった。役人から麦粉、乾魚、牛肉を贈ってもらったが肉食はしないと行って牛肉はいつも返した。</p> <p>ここに 5 カ月ほど留まる内麦粉は無くなり、鮭と乾し魚を食べ暮らしたが、11 月頃には麦も魚も食い尽くし二日間食を絶った。このような土地にきて餓死に及ぶような苦しい目に合わなければならぬのかと嘆くのも尤もである。ある日役人の家来が近くに牛がいることを聞き出しそれを屠殺した股を二つ持ち帰った。伊勢生まれで日頃は獣の肉は食わないが餓死するよりはましと磯吉がさきに小刀をもって、一塊食べると残る者も手に手に取って食べた。それから牛肉ばかりを 8 人で一日の食とし凌いだ。家の者は牛肉を目の前にしながらも官給のものなので猥に食べられず桜の木のアマ皮に魚の子を交えて食べていたが目も当てられぬ有様であった。一方光太夫は役人から養われていたので食べ物不自由はなかった。8 人のものは牛の股一つを二十日ばかりで食い、後には牛肉百匁と麦一掴みで二カ月余の命を繋いだが次第に精力が無くなり足も弱り歩行も不自由、餓死するよりはましと桜の木の外側を切ったりして水に浸したもの四五日食した。この危難に 4 月 5 日辰の刻与惣松、ン同じく 11 日に勘太郎、5 月 6 日に藤蔵が病死した。いずれも我が国にはない病気であった。皆、力が亡くなり心細い状況を見て宿の者は「何とか忍び給え、飢饉もしばらくで終わり 5 月に入れば川の氷も解け、魚が遡上するのを網で採り水煮するとこの上なくおいしい。この辺りは塩が少なく値段は高いので貧しき者は塩を用いない」と。</p> <p>この後川舟に乗り半島を横断し、7 月に西岸チギリ着、更に船に乗り 8 百里、順風に恵まれ漸く大陸の東岸ヲホツカに到着した。ここはいろいろの国の商人がいた。更にここから極寒地シベリヤを 1,013 里でヤクーツクへ、更に馬・橇に乗って 2,486 里、越冬し翌年 2 月 7 日イルクーツクに到着。</p> <p>(詳細省略)</p>		
次回予定	令和 1年 9月12日 10:00~12:00 於:区役所区民活動センター 第一学習 磯子村 安室忠治家文書②		